Osaka University Knowledge Archive

Title	山片蟠桃『夢ノ代』雑書篇訳注（四）
Author(s)	岸田, 知子
Citation	中国研究集刊. 2013, 57, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58714
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国研究集刊　巨号（総五十七号）平成二十五年十二月　一―一八頁

山片蟠桃『夢ノ代』雑書篇訳注（四）

岸田知子

一、テキストは、関西大学図書館所蔵写本を底本とし、これに句読点等を施した日本思想大系（岩波書店）本を参照した。
一、漢字は常用漢字を用いた。
一、コト、ドモ、シテを記す記号はカナ表記に改めた。
一、送り仮名・振り仮名のうち片仮名は底本による。平仮名は訳注者が施した。
一、底本の欄外書き込みは（欄外：）として該当箇所に挿入した。
一、「　」は底本では章末にある。別本に拠るものと思われる。岩波本に従って本文中に挿入した。
一、各章のタイトルは訳注者がつけた。なお、注はなるべくわかりやすく詳しく書いた。

十二　《経書について》（下）

唐ニ九経ト云（いう）ハ、礼・詩・易・書・周礼・儀礼・春秋ノ三伝①ヲ加フ。宋ニ詩・書・易・周礼・礼記・春秋ヲ六経トシ、孟子ヲ加ヘテ七経トス。又論語・孝経②ヲ加ヘテ九経トス。ソレヨリ邢昺（ケイヘイ）③、疏ヲツクリ④、易・書・詩・周礼・儀礼・礼記・左氏伝・公羊伝・穀梁伝・論語・孟子・孝経・爾雅⑤ヲ十三経トス。朱子、易・詩・書・春秋・礼記ヲ五経トシ、礼記ノ中ヨリ天学⑥・中庸ヲ除キ出シ、論・孟ニナラヘテ四書トス。明（みん）ニ五経・四書ノ大全（たいぜん）⑦ヲツクリ、性理大全（せいりたいぜん）⑧トヲ三大全トス。孟子ハ諸子ノ類ニアラズ。学・庸⑨ハ礼記ノ類ニアラズ。ユヘニ朱子、論語ニナラベ⑩四書トシテ学者ニヲシユ。コ

レヨリ学問ノ士マヅ四書五経ヲ熟読スルコトトナル。歴史ハ左伝・国語⑪ヲメ⑫二十一史⑬アリ。ヨミツクスベカラズ。初学ノ士ハマヅ己(おのれ)ヲ脩メ、家国ヲ治ムルノ書⑭ヲ専(もっぱ)ラトシ、ソノ上ニコソ諸書ヲヨムベシ。ユヘニ知レタルコトナガラ、コヽニ丁寧ニコノコトヲ云。

【注】

①『春秋』についての三つの伝（解説書）。『公羊伝』『穀梁伝』『左氏伝』。

②孔子が曾子に孝について説いたとされる書。

③宋の学者。十三注疏の『論語』『孝経』『爾雅』の疏を作り、三礼・三伝の注疏を校定した。

④岩波は「ツクリテ」。

⑤最も古い字書とされ、周公の作という伝承がある。

⑥「大学」の誤り。

⑦明の永楽年間に胡広らが世祖永楽帝の勅命で作った書で、『五経大全』は朱子学の立場からの五経の注釈書、『四書大全』は同じく四書の解説書。

⑧明の永楽十三年（一四一五）に胡広らが世祖永楽帝の勅命で作った書で、宋の学者一二〇人の説を集めたもの。『四書大全』『五経大全』とともに永楽三大全と呼ばれる。

⑨『大学』と『中庸』。

⑩岩波は「ナラベテ」。

⑪春秋時代の歴史を国別に記したもの。二十一巻。周の左丘明の作と伝えられるが、定かではない。『春秋左氏伝』に対して『春秋外伝』とも呼ばれる。

⑫岩波では「始メ」に作る。ここでは「始」を書き損じ、「メ」を「シテ」の略字とみなすか。）

⑬正史と呼ばれる『史記』『漢書』『後漢書』『三国志』『晋書』『宋書』『南斉書』『梁書』『陳書』『北魏書』『北斉書』『周書』『隋書』『南史』『北史』『唐書』『五代史』を十七史、『遼史』『金史』『宋史』『元史』を加えて二十一史という。さらに『明史』を加えて二十二史、『旧唐書』『旧五代史』を加えて二十四史、『新元史』を加えて二十五史という。

⑭『大学』に「修身斉家、治国平天下」とあって、儒教を学ぶ目的とされた。したがって、この「書」は儒教の書をいう。

【現代語訳】

唐において九経というのは、『礼』『詩』『易』『書』『周礼』『儀礼』に『春秋』の三伝を加える。宋にては『詩』『書』『易』『周礼』『礼記』『春秋』を六経とし、

『孟子』を加えて七経とした。また『論語』『孝経』を加えて九経とした。

それより後、邢昺が疏を作り、『易』『書』『詩』『周礼』『儀礼』『礼記』『左氏伝』『公羊伝』『穀梁伝』『論語』『孟子』『孝経』『爾雅』を十三経とした。朱子は『易』『詩』『書』『春秋』『礼記』を五経とし、『礼記』の中から「大学」篇と「中庸」篇を取り出して、『論語』『孟子』にならべて四書とした。明にては五経・四書の大全を作り、『性理大全』と合わせて三大全とした。

『孟子』は諸子百家の類ではない。『大学』『中庸』は『礼記』の類ではない。だから朱子は、『論語』にならべて四書として学ぶ者に教えた。これ以後、学問をする人は、まず四書五経を熟読することとなった。

歴史は『左伝』『国語』を初めとして、（正史だけでも）二十一史ある。読み尽くすことはできない。初学者は、まず己を修め、家国を治める書物をひたすら読み、その上でこそ諸々の書を読むべきである。だから、よく知られたことではあるが、ここに丁寧にこのことをいうのである。

十三　《老子について》

老子ノ書ハ古書ナリ①ト貴トビ、又ソノ文中ニ名言多ク、史記ニ「孔子、礼ヲ老子ニ問フ」②トアレバ、孔子ノ師ナリトシ、又漢ノ曹参（そうさん）③コノ道ヲ尊トミ④、文帝⑤及⑥後世ノ天子多ク尊敬シ、ツイニ帝号ヲ諡リテ⑦孔子ヨリ上ニ位セシムル⑧コトナリ。伊藤蘭嵎子⑨曰、老聃⑩古者実ニ無シ二其人一。蓋荘周⑪所下創（ハジメテヨセ）寓レ名ヲ将立（シント）二己（シユクカト）カ一家一言ヲ、為シ二之ヲ尸（シ）ト一⑫為シ二之ヲ主ト一⑬、自為リ二祝嘏一⑭以告ク中神語ヲ上也矣。亦猶（ナヲ）シ下項梁⑮立テテ二楚懐王ノ孫心ヲ一⑯以収ムル二人心ヲ一者上。夫以テレ何ヲ知ルレ之ヲ邪。昔者孔子列二序ス古之聖賢ヲ一、親ミテ二⑰論語ヲ一而当シレ見ル焉⑱。堯・舜・禹・湯・文・武・周公・三仁⑲・夷・斉⑳不レ啻（タタナラ）㉑。管仲㉒、曰仁也、曰（ごとクナラン）如二其仁ノ一与㉓。晏平仲善ク与レ人交ル、曰功用之臣也㉔。国僑㉕・展禽㉖・少連㉗・滅文仲㉘・史魚㉙・遽伯玉㉚・荷蕢㉛・楚狂㉜・長沮・桀溺㉝・摯・干・繚・缺㉞・左丘明㉟・老彭㊱、皆挙誦㊲之。甚哉、夫子之欽慕古昔聖賢君子、不遺一時之聞人畸士㊳、夫如是也。若実ニ有ラハ二老聃ト云フ者一、不レバレ列二諸ヲ隠居放言ノ㊴内ニ一、必与二以レ杖ヲ叩クレ蹠ヲ㊵同クシレ科ヲ袪ニシ㊶レ之ヲ。而無三一言之謂二老聃ヲ一、無キ三一

語之渉(ワタル)ニ季[42]耳ニ一。此実ニ無二其人一之証也。孟子拒キ二揚・墨ヲ一、告子・於陵仲子・許行・夷之亦痛ク拒レ之ヲ[43]。而无ナク三一辞之議スル二老聃ヲ一、無キ三一言之非トスル二李耳ヲ一。此モ亦実ニ無二其人一之証也。荀子所レ非トスル者十二子[44]、老聃不レ与カラ焉。是モ亦実ニ无ノ二其人一之証也。而[45]其天論ニ曰、慎子有リテ見ル二於後ニ一、無レ見ル二於前ニ一、老子有リテ見ル二於詘(クツニ)一、無シ見ル二於信(シンニ)一[46]。老子ハ蓋日子[47]之誤ノミ耳。非トス二十二子ヲ一、連子テ曰二慎到・田駢ヲ一。亦[48]叙ス二於慎子之後、宋子之前ニ一。故知二其老・田字相誤チ也。史遷[49]輙チ信シ二漆園之吏[50]之寓言ヲ一[51]、為ニ立二其伝ヲ一、為二姓ハ李、名ハ耳ト一、為ニ周ノ柱下ノ吏ト一[52]。為二孔子問ト一レ礼ヲ、凡五千言之書為三出ル レ関ヲ時ニ授ク二尹喜(いんき)ニ一云者[53]、蓋シ皆妄ト云爾(ノミ)[54]。予独リ何人ゾ耶(ヤ)。非ス二敢テ好ミ奇ヲ誇リ異ニ、妄ニ為ニ此説ヲ一焉。然レハ則今所レ伝フル老子之書何人之所ナル成ス耶。蓋シ戦国之末接レ秦ニ、聖猷否塞[55]。故ニ人或ハ襲(ヨソヒ)レ二荘子之意ヲ一、并(ならび)ニ剽二竊シ[56]其語ヲ一、以作二老・列二書ヲ一[57]、而播(ホドコス)二諸ヲ後ニ一也。下略。

蘭嶋子初(はじめ)テコレヲ云。才蔵(さいぞう)氏コレヲ張氏ガ老子是正(ぜせい)ノ序ニ述ル[58]。古今未発ノ言ニアラズヤ。古ヘハミナ、カクノゴトシ。尚書ノ中ニ議スベキ多シ。大戴礼(だたいれい)[59]尚(なお)シカリ。并ニ老子・荘子・列子・管子ノルイ同ジ。何トモ心得ザルコト多シ。マヅ老子ニテ一二ヲ挙ルニ、伊藤氏曰、「老子ニ曰、『将スレハ レ欲ト レ歙(チヂメン)レ之ヲ、必固ヨリ張ル レ之。将欲ト レ弱セント レ之ヲ、必固強クス レ之ヲ。将ハ レ欲ト レ廃セント レ之ヲ、必固ヨリ興スヲ レ之ヲ。将ト レ欲レ奪ハント レ之ヲ、必固与フ レ之ヲ』[60]、コレ蘇秦・張儀[61]ノ功利[62]ノ術、常[63]ニコレニ依ル[64]也。自然・自化[65]ノ説ト相反スルコト甚シ」。又曰「連子ニ称ス仁義ヲ一[66]、論語ニ所レ無キ、始見ル二於孟子及大伝一[67]。而此書屡(シハシハ)曰二道徳仁義ヲ一」[68]ノコト、経論(けいろん)ニ述ブ[69]。コノ熟字アレバ孟子以後ノ書ナルコトシルベシ。又曰、「将軍之称亦古ヘ所レ無キ、而日偏将軍上将軍ト一[70]。又[71]、立天子ヲ一置ク二三公ヲ一[72]、及以レ正ヲ治メ レ国ヲ、以レ奇ヲ治ム レ兵ヲ[73]。夫古無二三公[74]之名一、曰二三事ヲ一[75]也。奇正固ヨリ非二春秋間之語ニ一、而孫・呉ノ[76]常言爾(ノミ)」。ソノ余、名論アレトモ本書ニユヅリテコ、ニ書サズ(シル)[77]。大抵秦火[78]ニカ、リタル書ハ多ク後世ノ擬作トナル。シカレバ漢代ノ書也。論孟ノ幸(さいわい)ニシテ存スルハ、天下ノ幸甚(こうじん)コノ上ヤアルベキ。ソノ余ハ疑フベキ多シトスベシ。

[履軒先生曰[79]、「老子ソノ人ノ有無ハヲヒテ論ゼス。或曰、『易ノ旨ヲ得タリ』ト。シカルニ易ノ書タル、ソノ本字ハナシトイヘドモ、九六[80]ト称シテ、コト〳〵ク陰陽ヲ主トス。天下万物陰陽ノ外ニアラザルヲ以テ也。ソノ余、剛柔・中正・吉凶・悔吝(かいりん)[81]ミナ陰陽ノ二ニシテ[82]、

ミナソノ時所位ニカナフコト至ラザル所[83]ナシ。シカルニ老子ノ書ハソノ章句ミナ陰柔ニシテ乾[84]ノ功ナク、スベテ坤徳[85]ナリ。一ヲ以テ云ヘバ、「欲奪之、固ヨリ予之[86]」「以徳報怨[87]」ノ類ナリ。コレヲ権謀・奸智ト云ハ誤也。ミナ坤陰[88]・柔順ヲ以テ云。一部ノ老子ミナシカリ。蓋ソノ人トナリ善柔ニシテ謙譲ニアマリ、天下ノコト[89]過タルヲ抑ヘ、不足ヲ尊ブノ外ナキコトヲ工夫シテ書[90]タルコトニテ、其学カタシトス[91]。漢ノ竇大后[92]コレヲ信ズルハ、婦人[93]ノ柔順、坤徳ヲ以テ守ルノ道ヲ得タリトイヘドモ、コレヲ武帝ニスヽムルハアヤマリナリ。老子ノ大柔大弱ノ徳ヲ以テ、アニ至大至剛天下ヲ治ム九五ノ乾徳[94]ヲ窺フベケンヤ。荘子ノ書ト大ニ異ナリ、老子ノ辞ハ確実従順、荘子ノ辞ハ浮虚放蕩、混ズベカラズ」。」

【注】

①岩波は「也」。

②『史記』巻六十三老荘申韓列伝第三に「孔子適周、将問礼於老子云々」とある。

③漢の高祖の功臣で、二代目の宰相。『史記』巻五十四曹相国世家に「聞膠西有蓋公、善治黄老言、使人厚幣請之、既見蓋公、蓋公為言治道貴清静而民自定、推此類具言之、参於是避正堂、舎蓋公焉、其治要用黄老術、故相斉九年、斉国安集、大称賢相」とある。

④岩波「尊ビ」。

⑤漢の高祖劉邦の中子。呂太后の死後、即位。『風俗通義』巻二孝文帝に「文帝本修黄老之言、不甚好儒術、其治尚清浄無為」とあり、『史記』外戚世家にも「竇太后（文帝の皇后）好黄帝老子之言、帝及太子諸竇不得不読黄帝老子、尊其術」とある。なお、漢の創立時、帝室の政治基盤は脆弱で、秦の法家政治に疲弊した人々に対して積極的な政策をとることは不可能であったため、高祖は秦を降して関中に入った直後に「法三章（殺人は死刑、傷害・盗みには相当罪）」を布いた。思想面では黄老思想と呼ばれる老子風の政治思想が流行した。これを実際の政治に運用したのは曹参であった。斉の相国としてこの施策を用い、その実績が認められて、高祖の子の恵帝の二年（前一九三）に漢の相国となり、黄老思想に基づく政治を行なった。曹参は三年後に世を去ったが、黄老思想による政治は恵帝・呂后・文帝・景帝に至るまで継承された。曹参の黄老政治は、法家政治への批判として登場したが、法家政治によって鍛えられていた官民の法意識・政治遺産があってこその政治であった。

⑥岩波「及ビ」

⑦唐の高宗が太上玄元皇帝と追贈、玄宗の天宝二年（七四三）、大聖祖の号を加え、八年、大道玄元皇帝と称し、十三年、大聖祖高上大道金闕玄元天皇大帝と称した。宋の真宗が太上老君混元上徳皇帝を追贈し、その後は封号がない。

⑧孔子には唐の玄宗が文宣王という王号を追贈し、宋の真宗が至聖、元の成宗が大成の称を重ね加えたのみ。

⑨江戸中期の儒学者。伊藤仁斎の第五子。博学・能文で、長子の東涯とならび称された。紀州藩の儒官。一六九四～一七七八。引用は張静撰『老子是正』によせた序（延享四年）。（張静撰『老子是正』は『国書総目録』には「寛延四年刊」が所載。）

⑩『史記』老荘申韓列伝には「姓李氏、名耳、字聃」とある。一説には「姓李、名耳、字伯陽、諡聃」ともいう。

⑪荘子の姓名。『史記』老荘申韓列伝の荘子の項に「其学無所不闚、然其要本帰於老子之言」とあり、また「以詆訿孔子之徒、以明老子之術」とあることから、老子は荘子の先人であって、老子の学説は荘子に受け継がれたと見られていたことがわかる。また『荘子』庚桑楚篇に「老聃之役、有庚桑楚者、偏得老聃之道、以北居畏累之山」とある。「役」とは弟子のこと。老子の弟子の庚桑楚のことを書いているのであるから、そのままを信用すれば、荘子は老子より後の世代になるが、この篇は雑篇に属し、成立は内篇より遅れるとみてよい。

⑫かたしろ。祭礼の時、神の身代わりとして祭りを受けるもの。古くは人が行なっていたが、のちに木で作ったもので代用した。木主、神主（しんしゅ）。仏教では位牌という。

⑬木主、神主をいう。

⑭みたまやの祭りにのりとをあげる人。『礼記』礼運篇。

⑮項羽の叔父。項羽とともに秦末に挙兵した。

⑯戦国時代の楚の懐王は秦に殺された。項梁は懐王の孫の心（しん）を立てて懐王とし、項羽によって義帝とされたが、のちに殺された。

⑰岩波「観」。

⑱以下の人物について孔子が語っていることが『論語』に見える。堯・舜は雍也篇など、禹は泰伯篇など、湯は顔淵篇など、文王は子罕篇、武王は泰伯篇、周公は述而篇など、三仁（微子・箕子・比干）は微子篇、夷・斉（伯夷・叔斉）は公冶長篇など。

⑲殷の三人の賢人。微子・箕子・比干。『論語』微子篇

に「微子去之、箕子為之奴、比干諫而死、孔子曰、殷有三仁焉」。

⑳伯夷・叔斉。殷の末期、孤竹君は叔斉を跡継ぎにしようとしたが、叔斉は兄の伯夷に譲ろうとし、伯夷も受けず、二人で西伯昌（のちの周の文王）のもとへと行った。たまたま昌が亡くなり、その子の武王が殷の紂王を討伐に行くところに出会い、これを諫めたが聞き入れられず、首陽山に隠れて餓死したという（『史記』伯夷列伝）。『論語』には四カ所に登場（公冶長・述而・季氏・微子）。孔子は清廉な賢人として評価している。

㉑ただ…だけではない。

㉒管仲については経論篇二十二にて述べている。斉の桓公に仕えて諸侯の覇者たらしめた。『論語』憲問篇に「子路曰、桓公殺公子糾、召忽死之、管仲不死、曰未仁乎、子曰、桓公九合諸侯、不以兵車、管仲之力也、如其仁、如其仁、子貢曰、管仲非仁者与、桓公殺公子糾、不能死、又相之、子曰、管仲相桓公覇諸侯、一匡天下、民到于今受其賜、微管仲、吾其被髪左衽矣、豈若匹夫匹婦之為諒也、自経於溝瀆而莫之知也」とある。

㉓岩波「也」。

㉔晏平仲は斉の名宰相。名は嬰、平は謚、仲は字。鄭の子産よりやや後輩で、孔子の先輩にあたる。『論語』公冶長篇に「子曰、晏平仲善与人交、久而人敬之」とある。「曰功用之臣也」にあたる言は『論語』に見当たらない。

㉕鄭の名宰相公孫僑、字子産。前五二二年、孔子三十一歳のときに亡くなった。『論語』公冶長篇「子謂子産、有君子之道四焉、其行己也恭、其事上也敬、其養民也恵、其使民也義」、憲問篇「或問子産、子曰、恵人也」。（憲問篇のこの前項にも登場する）。

㉖魯の賢大夫。姓は展、名は獲、字は子禽。恵は謚。柳下の地にいたので柳下恵と呼ばれる。『論語』衛霊公篇「子曰、臧文仲其竊位者与、知柳下恵之賢、而不与立也」、微子篇「逸民、伯夷、叔斉、虞仲、夷逸、朱張、柳下恵、少連」、同篇にもう一箇所登場する。

㉗『論語』微子篇に登場。人物については不詳。

㉘魯の大夫。姓は臧孫、名は辰、文は謚、仲は字。孔子の生まれる六十五年前に亡くなった。『論語』公冶長篇および衛霊公篇に登場。

㉙衛の大夫、史鰌、字は子魚。『論語』衛霊公篇に「子曰、直哉史魚、邦有道如矢、邦無道如矢、君子哉蘧伯玉、邦有道則仕、邦無道則可巻而懐之」とある。

㉚衛の大夫。憲問篇および衛霊公篇に出てくる。

㉛『論語』微子篇の「子路従而後、遇丈人以杖荷蓧」の丈人（老人）のことか。孔子は子路から話を聞いて「隠者也」といった。なお、底本では「荷ㇾ蕢ㇾ楚」と誤る。

㉜『論語』微子篇に「楚狂接輿歌而過孔子」とある。世をあきらめて狂人のふりをしている隠者。

㉝この二人は隠者の名。『論語』微子篇に登場。

㉞摯は大師、干は亜飯（二度目の食事をすすめるときの音楽係）、繚は三飯、缺は四飯であった人物の名。『論語』微子篇に「大師摯適斉、亜飯干適楚、三飯繚適蔡、四飯缺適秦、鼓方叔入于河、播鼗武入于漢、少師陽・擊磬襄入于海」とある。殷末（『漢書』注による。新注では孔子の時代）、音楽が乱れたので、音楽の役人がそれぞれ他の地に移ったことをいう。

㉟『論語』公冶長篇に「子曰、巧言令色足恭、左丘明恥之、丘亦恥之、匿怨而友其人、左丘明恥之、丘亦恥之」とある。孔子の弟子とも同時代の人ともいわれるが不明。新注では昔の有名な人とされている。『春秋左氏伝』の著者といわれてきた。このことについては本書経論篇七にて論じている。

㊱『論語』述而篇に「子曰、述而不作、信而好古、竊比於我老彭」とある。殷の賢大夫をいうとか、鄭玄の注では老聃（老子）と彭祖（昔の長寿者）のこととするほか、諸説ある。

㊲岩波「称」。

㊳「聞人」は有名人、「畸士」は性質や行ないが普通の人とは違っている人。

㊴隠れ住んで放言する者。注㉖にあげた『論語』微子篇の文の後に出てくる。「謂虞仲・夷逸、隠居放言、身中清、廃中権」。

㊵「蹊」は「脛」の誤り。『論語』憲問篇に「原壤夷俟、子曰、幼而不孫弟、長而無述焉、老而不死、是為賊、以杖叩其脛」とある。うずくまって待っていた原壤を、孔子は「幼少の時はへりくだらず、大きくなっても言うほどのことはなく、年寄りまで生きて死にもしない。こういうのが人を害する賊なのだ」と言って、杖でその脛を打った。

㊶そで。そでをかかげるさま。あげる。

㊷「李」の誤り。

㊸楊は楊朱、墨は墨翟。於陵仲子は於陵に隠れていた斉の陳仲子のこと。孟子はここにあげた人々の考えを批判している（『孟子』滕文公上・告子）。

㊹『荀子』第六に非十二子篇があり、戦国時代の十二人

の思想家を批判している。対象となった十二人は以下の通り（六つのグループに分けられている）。它囂と魏牟、陳仲と史鰌、墨翟と宋鈃、慎到と田駢、恵施と鄧析、子思と孟子。

㊺岩波「亦」。

㊻このことばは『荀子』第十七天論の末尾の項にある。詘は屈、信は伸に同じ。慎子（慎到）は後ろのほうばかりを見て前を見ず、老子はまげるほうばかりを見て伸びるほうを見ないの意。このあとに墨子・宋子（宋鈃）について述べている。

㊼「日子」は「田子」の誤り。田子は田駢。

㊽岩波「此亦」。

㊾『史記』の作者、漢の司馬遷をいう。太史公遷を略したものか。

㊿岩波「漆園吏」に作る。荘子のこと。『史記』老荘申韓列伝に「荘子者蒙人也、名周、周嘗為蒙漆園吏」とある。

51ほかの物事にことよせて考えを述べることば。たとえ話。

52『史記』老荘申韓列伝では「周守蔵室之史也」とある。守蔵室は図書館。周では図書が宮殿の柱の下にあり、図書をつかさどる官吏はそこに立っていたから柱下吏と呼ばれた。そこから、老子の別名となった。

53『史記』老荘申韓列伝による。五千言の書は『老子』の書を指す。尹喜は関所の役人であった人物。のち『列仙伝』では予言をよくする仙人として描かれている。

54岩波「妄言爾」。ここは書き誤りであろう。

55聖猷は聖人のはかりごと。ふつうは天子の考えの意で用いられるが、ここは儒教の聖人の教え。否塞は閉じふさがる意。

56剽窃とも書く。他人の文章や学説を盗み取って自分のものとして発表すること。

57『老子』と『列子』。『列子』は列禦寇の撰とされる書。内容的に列子死後のことがらが多いので後人の偽作ともいう。『冲虚真経』ともいう。

58才蔵氏は伊藤蘭嵎の字。注⑨参照。

59前漢の戴徳撰。礼に関する学説を集めて八十五篇に整理したが、現存は三十五篇。『礼記』の編者の戴聖は甥なので小戴といい、戴徳を大戴という。書名は慣用的に「だたいれい」と読む。

60『老子』三十六章。

61戦国時代末期の思想家。蘇秦は合従を唱え、張儀は連衡をとなえたから縦横家といわれる。小川環樹氏は

『老子』三十六章について「この章とよく似た文が『韓非子』および『戦国策』の魏策に『周書』から引かれ」と注し、さらに「この章の前半は『周書』の佚文にほぼ同じである。『周書』は陰謀の書といわれ、蘇秦はこれを学んだというから、戦国時代の複雑な各国のあいだのかけひきに原理を提供したものである」と述べている（『老子』中公文庫）。

⑫功名と利得（『管子』立政篇）。

⑬岩波「ツネ」。

⑭岩波「ヨル」。

⑮自然は「自ずから然り」、ありのまま、本来の姿で人工が加わらないことをいう。『老子』二十五章に見える。自化は「自ずから化す」。『老子』三十七章、五十七章に見える。

⑯『老子』十八章に「大道廃有仁義」とある。『孟子』には梁恵王上・滕文公下・尽心上・告子上など。

⑰『礼記』の篇名、あるいは『易経』繫辞伝をいうが、『礼記』大伝には見られず、郷飲酒義篇に「仁義接」とある。『易経』では説卦伝に「立人之道、曰仁与義」とあるが、このことをいうか。

⑱岩波はここで切って、このあとに仁義を入れる。

⑲経論篇三十四。

⑳『老子』三十一に「偏将軍居左、上将軍居右」とある。

㉑岩波「又曰」。

㉒『老子』六十二。

㉓『老子』五十七。

㉔臣下としての最高位。時代によって名称は変わり、周では太師・太傅・太保、前漢では丞相・大尉・御史大夫など。

㉕『詩経』小雅・雨無正に「三事大夫、莫肯夙夜」とあり、鄭玄以来、この「三事」が三公、「大夫」は六卿及び中下大夫であるとされている。つまり、三公の古名が三事であったことをいう。三事の名の由来は、天・地・人に事えるということであろう。

㉖孫子と呉子。

㉗岩波「シルサズ」。

㉘秦の始皇帝による焚書をいう。

㉙中井履軒撰『老子雕題』に同趣旨の文がある。

㉚易では陽を表すのに九、陰を表すのに六を用いる。

㉛『易経』の用語。繫辞伝に「明吉凶剛柔、相推而生変化、是故吉凶者失得之象也、悔吝者憂虞之象也、変化者進退之象也、剛柔者昼夜之象也」とある。悔吝は悔い怨むの意。中正は易の六爻中の二と五を中といい、陽爻が陽位（奇数）におり、陰爻が陰位（偶数）にい

るのを正という。従って二が陰（六二）、五が陽（九五）であれば中正となる。

㉒「二」は岩波「二ツ」。陰陽の二つの働きによるの意。剛柔は陽と陰を表し、中正は陰陽がそれぞれあるべき位置にあることで、それによって吉凶が分かれる。吉は得られること、凶は失うこと。失えば悔いうらむことになる。

㉓岩波「処」。

㉔乾は六爻がすべて陽の卦で、強い陽の働きをもつ。

㉕坤は六爻がすべて陰の卦。

㉖岩波ではカタカナの「ヨリ」なし。注㉚参照。

㉗『老子』六十三に「報怨以徳」とある。

㉘ここは坤徳の誤りであろう。

㉙岩波「事」。

㉚岩波「カキ」。

㉛岩波「其」を取り「学ガタシトス」とする。

㉜文帝の皇后。道家思想を好んだ。景帝は子、武帝は孫にあたる。注⑤参照。

㉝岩波「婦女」。

㉞乾は強い陽の働きをもち（注㉔）、当然、六爻の五の位置に九（陽爻）があるから中正を得ていて（注㉒）、天子の徳を表すといわれる。

【現代語訳】

『老子』の書は古い書であるからと貴ばれ、またその文中に名言が多く、『史記』に「孔子、礼を老子に問ふ」とあるので、老子を孔子の師であるとみなし、さらに漢の曹参が老子の道を尊び、文帝や後世の天子が多く尊敬し、ついには帝号を追贈されて孔子より上位に置かれることになった。

伊藤蘭嶋先生は次のように言っている。老聃は昔、実在しなかった。思うに、荘周が初めてその名をあげ、自身の説の根拠とし、これを祭祀のかたしろとし、位牌として、自らが祝詞の読み役となって、神の言葉を告げたようなものである。また、項梁が楚の懐王の孫にあたる心を立て、それによって人心を引き入れようとしたのと同じである。

それは何によってわかるかというと、昔、孔子は古の聖人賢人を列挙した。それは『論語』にて見ることができる。堯・舜・禹・湯・文・武・周公・三仁・伯夷・叔斉、そればかりではない。管仲は「仁なり」とも「その仁に如かんや」とも言われている。晏平仲は「よく人と交わる」と言われ、「功用の臣なり」とも言われている。国僑・展禽・少連・臧文仲・史魚・蘧伯玉・荷蕢・楚狂・長沮・桀溺・摯・干・繚・缺・左丘明・老彭といっ

た人々をすべてあげて、その名を称している。たいへんなものだ、孔子先生が昔の聖賢君子を慕い、当時の有名人や一風変わった人まで残さず列挙しているのは、ここに見る通りである。

もし、ほんとうに老聃という人がいたならば、これを（虞仲や夷逸のような）隠れ住んで放言する者たちの中にいれない場合は、必ずや（原壌のように）杖で脛を打たれるのと同じ（むだに生きているという）罪になるはずだから（そのどちらかになるはず）、その名をあげるであろう。それなのに、ひとことも老聃を言わず、李耳にも言及しない。これこそ実際にその人はいないことの証拠である。

孟子は楊子や墨子を批判し、告子・於陵仲子・許行・夷之も激しく批判している。しかし、老聃を議論する言葉はひとことともなく、李耳を非難する言葉もまったくない。これもまたこの人が実在しない証拠である。荀子の非十二子の中に老聃は入っていない。これもこの人が実在しない証拠である。さらに荀子の天論篇では「慎子は後に見るありて、前に見るなし。老子は詘に見るありて、信に見るなし」とある。ここの老子はおそらく田子の誤りであるにちがいない。荀子の非十二子では、二人ずつ並べて「慎到・田駢」というように述べているが、そこでも慎子のあとで、宋子の前に述べられている。だから老と田の字が間違ったことがわかるのである。

司馬遷は漆園吏の荘周の寓言を信じて、その伝記を作り、姓は李、名は耳、周の図書館の役人であるとして、孔子が礼を質問したとした。全部で五千言の書を、関所を出るとき尹喜に授けたというのは、おそらくすべてでたらめであろう。こういう私はいったい何者だろう。あえて変わったことを好み、人と違うことを誇って、でたらめにこの説を言い出すような人間ではない。そうすると、今に伝わる『老子』の書は、どういう人が作ったのであろうか。思うに、戦国の末、秦の建国にあたり、聖人の教えが塞がれてしまった。そこで、ある人が荘子の考えを継ぎ、同時に荘子の言葉を盗んで、『老子』『列子』の二書を作り、これを後世に伝えたのであろう。以下略。（伊藤蘭嶋の引用はここまで）

蘭嶋先生が初めてこれを言い出された。才蔵氏はこのことを張氏（靜）の『老子是正』の序に述べられた。古今未発の言ではないだろうか。昔のことについては、どれもこのようなものである。『尚書』の中には議すべきことが多い。『大戴礼』もまた同様である。ならびに『老子』『荘子』『列子』『管子』の類も同じである。なんとも合点のいかないことが多い。

まず『老子』において一、二点を挙げてみよう。伊藤（蘭嵎）氏はいう。

老子に「縮めようと思えば、しばらく存分に伸びきらせておくに限る。弱めようとするなら、しばらく存分に強がらせておくに限る。廃れさせようとするなら、しばらく存分に元気づけておくに限る。奪い取ろうとするなら、しばらく貪欲に取らせておくに限る」とあるが、これは蘇秦や張儀の功利を得ようとする術においていつも頼る方法である。（老子の主張である）自然や自化の説と相反していること甚だしい。

また、次のようにもいう。「仁義」と二字並べていうのは、『論語』にはなく、『孟子』や『易経』大伝に初めて見られる。そして、この『老子』ではしばしば「道徳仁義」の語をいう。仁義のことは経論篇で述べた。この熟語があれば『孟子』以後の書であることがわかる。

さらにいう。将軍という呼称は昔にはないが、『老子』には「偏将軍」「上将軍」が出てくる。また、「天子を立て、三公を置き」や「正をもって国を治め、奇をもって兵を治む」とあるが、そもそも昔は三公の名はなく、三事といったのである。奇正というのは本来春秋時代の言葉ではなく、『孫子』『呉子』でよく使われる言葉である。そのほか、名論があるが、本書にゆずってここには記さないでおく。

大抵、秦の焚書にかかって焼かれた書は、多くは後世に擬えて書かれた。そうすると漢代の書になる。『論語』『孟子』が幸いなことに存続したことは、天下にとってこの上ない幸いであった。そのほかの書は疑うべきことが多いとすべきである。

［履軒先生はこういわれた。老子その人の有無については、ここでは論じない。ある人が「易の趣旨を得ている」といった。さて、『易経』という書は、本文には「陰陽」の語はないが、九六という爻を借りて述べ、すべて陰陽を中心に論じている。天下万物に陰陽以外のものはないという考えによるからである。そのほか、剛柔・中正・吉凶・悔吝などどれも陰陽の二つによるもので、みなその時や所や地位に適合し、行き届かないところはない。

ところで、『老子』の書はその文章語句がどれも陰であり柔であって、乾の働きはなく、すべて坤徳である。一例をあげれば、「奪おうとするなら、しばらくは与えておく」や「怨むべき仕打ちには身についた徳で応える」の類である。これを（蘇秦や趙儀のような）謀略やずるがしこさというのは誤りである。みな坤徳や柔順によるといえよう。『老子』の一部はどれもそうである。

おそらくその人となりは善良で柔弱で、謙譲の余り、天下のできごとの過剰な部分を抑制し、不足であることを尊重する外ないことを、工夫して文章にしたのであって、学ぶことがむずかしいといえる。漢の竇大后がこの思想を信じたのは、女性の柔弱で従順な性質や女性らしい坤徳を守るための道をここに見いだしたのであろうが、これを武帝に勧めたのは誤りであった。『老子』の大いに柔弱なる徳をもって、どうして至極強大な、天下を治める九五の乾徳を持つ武帝の力をうかがうことができるだろうか。

（『老子』は）『荘子』とは大いに異なる。『老子』の言葉は確実で従順であるが、『荘子』の言葉は浮ついたでたらめばかりであって、混同してはいけない。」

十四　《列子について》

列子ノ書①ハ荘周ノ作ル所ト云。列仙伝②ニ「鄭人、名ハ禦寇」トスレドモ、列仙伝ノ妄説取ルベカラズ。張堪③（欄外：張堪、晋人）トイヘドモ、ソノ出処ヲシラズ。只コノ書ヲ得ルノミニシテ、ソノ伝来ヲシラザル也。列子ノ書、仏語④ニ似タルコト多シ⑤。「和光同塵」ハ老子ニ出⑥、「死此生彼」ハ列子ニ出⑦。アヽコノ二書疑フベキカナ。ソノ余孔子ノ語ヲ引コト多⑧ト云ドモ、ミナ妄誕ナリ。ヨムベカラス。殊ニ風ニ乗ジテ天ニ昇ル⑨ト云人、ナンゾ天下ヲ治ムルノ道ヲシラン。

【注】

①列禦寇が書いたとされる書。偽作として疑う説が多い。

②前漢の劉向の撰というが事実は不詳。ここには列子は出ていない。列禦寇の名は『荘子』列禦寇篇に登場するのが初出である。『列子』の著者を戦国時代の列禦寇に結びつけたともいわれている。鄭人とするのは劉向の叙録においてである（注③参照）。

③晋の人。『列子』の注を書いた。その冒頭の「列子序」に『列子』成立についての解説があり、「然所明往往与仏経相参、大帰同於老荘」とある。また張堪注『列子（沖虚至徳真経）』（四部叢刊本）には前漢の劉向の校定した八巻本の叙録が付いている。この文章は、「右新書定著八章」で始まり「護左都水都者光禄大臣向所校列子書録永始三年八月壬寅上」で終わる。文中に「列子者鄭人也」「多寓言、与荘周相類、故太史公司馬遷不為列伝」とある。この劉向の文章も後人の偽託であると疑問視されている。なお、『列子』につい

ては福永光司氏の解説（中国古典文学大系４『老子・荘子・列子・孫子・呉子』）を参照。

④仏教語。あるいは仏教思想にもとづく言葉の意。

⑤岩波「ヲ、シ」。

⑥『老子』四「和其光、同其塵」。才智を包んで顕さず、世俗に交じって異を立てぬこと。

⑦『列子』天瑞篇「死之與生、一往一反、故死於是者、安知不生於彼」。

⑧『列子』仲尼篇には孔子が多く登場する。

⑨『列子』黄帝篇には、列子が老商氏を師とし、伯高氏を友とし、この二人の術を究めつくして、風に乗って帰ってきた（乗風而帰）とある。

【現代語訳】

『列子』の書は荘周によって書かれたという。『列仙伝』には「鄭人、名は禦寇」とあるが、『列仙伝』のでたらめな説は取るべきではない。晋の張堪でさえも、その出所を知らない。ただ、この書を手に入れただけであって、その由来を知らないのである。

『列子』には仏教の言葉に似たものが多い。「和光同塵」は『老子』に、「此に死に彼に生まる」は『列子』に出ている（どちらも仏教的な考えを示すものである）。そのほか、孔子のことばを引くことも多いが、みなでたらめである。読んではならない。ことに「風に乗って天に昇る」という人が、どうして天下を治める道を知っているというのか。

十五　《荘子について》

荘子ノ書ハ寓言①物ニヨソヘ又ハナキ人ヲツクリテ云ナリ重言自言ニテハ人信セザルユヘニ聖人賢人ヲカリテ言ナリ②巵言酒ノミハナシノゴトク面白ク説キテ媼婆ノ耳ニモ入ル也③ト、サマ〳〵ニ云ナシテ鄙賤匹夫④ノ耳ニモ入ル⑤ヤスキヤウニ書タルナリ。畢竟ハ仏説トソノ意同ジ。スデニ史記ニ⑥曰、「著レ書十万余言大抵率寓言也。作二漁父・盗跖・胠箧一、以詆二訾孔子之徒一、以明二老子之術一、畏累虚・亢桑子之属、皆空語無二事実一⑦」。カクノゴトクナレバ、スベテ荘子ノ書ノ文辞ハ取ルトモ、事実ハ取⑧マジキニ、カク云タル司馬遷、スデニ荘子ニ出タル許由⑨・老子ヲ信ジテ伝ヲ立ル。自カラ「箕山ニ登リテ」ト云ヘドモ、「其上ニ蓋シ有許由冢云⑩」トイヘバ、実ニ見ザルシルベシ。タトヒ実ニアリトイフトモ、荘子ノ寓言ニヨリテ好事ノ者⑪ノツクリタルモ亦⑫シルベカラズ。伊勢・源氏ノ寓言ニナラヒテ、名所古迹ヲ作ルガゴトシ。又子虚・烏有⑬ノ流ナリ。東坡氏⑭・

焦弱侯⑮・程子・朱子ノ諸賢、老列荘ノ三子ヲ評ズル精シケレバ⑯今コ、ニ略ス。シカレドモソノ文辞モ亦取ベキコト多キ⑰ユヘニ人コレニ惑フ也。正道ハ入ガタシ。詭道⑱ハ入ヤスシ。古今通蔽ナリ。ユヘニ天下万世ノ師トシテ、孔子ハ王号ヲ謚ルニ止リ、老子ハ帝トナル。何ゾソレカクノゴトキヤ。シカルニ隠居放言⑲ヲ志ス人ハ、コノ書ヲヨムトモシカラン。苟モ忠孝仁義ノ道ヲ行ヒ、国家ヲ治ムル人ハ、経書ニテ事足ルベシ。コノ書ハヨマズトモ可⑳。

【注】

①この「寓言・重言・巵言」は『荘子』寓言篇にある言葉。引用すると「寓言十九、重言十七、巵言日出、和以天倪」。ここは『荘子』全般の話の性質を述べているとされる。訳すと「この書物で私が語ったことばのうち、寓言―他事にかこつけたつくり話が十分の九を占め、重言―古人のことばを借りて重みをつけたことばが、十分の七を占める。巵言―そのときの便宜に従う臨機応変のことばは、日ごとに口から出て尽きることがなく、すべてをひとしくみる自然の立場で和合させるのである（森三樹三郎訳参照）。寓言でもあり同時に重言でもあるものが多いとすれば、十に九、十に七も成り立つ。「巵」は丸い酒器、盃のこと。郭象注に「夫巵満則傾、空則仰」とあり、この盃はいっぱいになると傾き、空になると上を向く、とある。新釈漢文大系本では「巵言」をつじつまの合わない発言と訳す。蟠桃は巵が酒器なので、酒飲み話と理解している。なお、この三語には割り注形式で説明が付されている。

②岩波「云也」。

③岩波「ナリ」。

④田舎のいやしい人物。

⑤岩波「入」。

⑥岩波「ニ」無し。

⑦『史記』荘子列伝の言。「十万余言」は「十余万言」の誤り。「漁父・盗跖・胠箧」は『荘子』の篇名（なお跖を足ヘンに庶と書くのは誤り）。「畏累虚」は、『荘子』庚桑楚篇で老子の弟子庚桑がいたという山。「亢桑子」は庚桑のこと。

⑧岩波「トル」。

⑨隠者の名。『荘子』逍遙遊篇に、堯が天下を許由に譲ろうとして断られた話が出ている。また、断ったあと川の水で耳を洗った（「洗耳」）といわれる（『高士伝』）。

⑩『史記』伯夷伝に「太史公曰、余登箕山、其上蓋有許由冢云」とある。箕山に登ったが、その上には許由の墓があったらしい、といっているように、実際に墓を見たのではないと蟠桃はいう。岩波は「『箕山ニ登リテ』トイヘドモ、『其上蓋有許由冢云』」に作る。

⑪好事家。ものずきの人。

⑫岩波「ツクリタルモノカ」。

⑬漢の司馬相如の「子虚上林賦」に登場する架空の人物。

⑭北宋の蘇軾。荘子に関する書として『広成子解』がある。弟の轍には『老子解』『道徳真経註』がある。

⑮明の焦竑。『老子翼』『荘子翼』などの著作がある。

⑯岩波「評スルクハシケレバ」。

⑰岩波「ソノ文辞ニ又取ベキコト多シ」。

⑱人をあざむく、いつわりの方法。対語は「正道」（『孫子』始計篇）。

⑲本篇十三の注㊴を参照。

⑳岩波「可也」。

【現代語訳】

『荘子』の書は寓言（物にことよせ、または実在しない人を創作していうもの）、重言（自分の言葉では人に信じてもらえないから聖人賢人を借りていうもの）、巵言（酒飲み話のようにおもしろく説いて老婆の耳にもよく入るもの）からなるとあるように、さまざまな語り方をして、無学な田舎者の耳にもわかりやすいように書いてある。つまりは仏教の話と意図するところは同じである。

すでに『史記』がいうように「書を著すところ十万余言、大抵率ね寓言なり。漁父・盗跖・胠箧を作り、孔子一派を批判し、老子の学説を明らかにした。畏累虚や亢桑子の類はどれも架空の話で事実ではない」。以上の通りなので、総じて『荘子』の文章から取ることがあっても、決して事実とは思ってはならない。このようにいう司馬遷自身が、『荘子』に登場した許由や老子を信じて、列伝を立てているのである。司馬遷はみずから「箕山に登りて」といっているが、「その上にはおそらく許由の墓があったらしい」というので、実際には見ていないことがわかる。たとえ実在していたとしても、『荘子』の寓言に拠って物好きな人が作ったものかどうか、わかりようがない。『伊勢物語』『源氏物語』の寓言にならって、名所旧跡を作るようなものである。また、司馬相如の作り出した子虚や烏有の類である。

蘇東坡・焦弱侯・程子・朱子といった諸賢が、老・

列・荘の三子を詳しく評しているので、今ここには省略する。しかし、『荘子』の文章には見るべきものが多い。だから、人はこれに迷わされる。正道は入りにくく、詭道は入りやすい。これは古今に通じる弊害である。ゆえに天下の万世にわたる師として、孔子には王号を諡にしたのにとどまり、老子には帝号が送られた。どうしてこれほどのことになるのだろうか。したがって、「隠居放言」を志す人は、この書を読むとしてもやむをえない。しかし、かりにも忠孝仁義の道を行ない、国家を治める人は、経書で事が足りるはずである。この書は読まなくてもよい。